

主題研究

英語力を育成する高等学校の学習指導に関する研究 - 指導に生かす評価方法の工夫をとおして - (第1報)

教科領域教育室 舟山美知

研究協力校

岩手県立花巻南高等学校

研究協力員

岩手県立久慈高等学校 菊池省治

研究の概要

この研究は、指導に生かす評価方法を工夫し、学習指導の過程における評価を意図的に進めることにより、英語力を育成する高等学校の学習指導の在り方を明らかにし、英語科の指導の充実に役立てようとするものである。

そのため、学習指導要領や英国のナショナル・カリキュラム等を基に、高等学校において育成する英語力の発達段階の見通しについて検討を行った。そして、実際の目的に応じて英語を使う力をとらえる評価方法を工夫し、評価結果を継続的にフィードバックする学習指導についての基本構想を立案した。また、これに基づき実態調査を行って「英語力の発達の見通し」を作成し、学習指導の試案を作成した。

キーワード：高等学校 英語科 学習指導 評価方法 発達段階
パフォーマンス 継続的フィードバック

研究目的

「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」は、経済・社会等のグローバル化が進展する中、子どもたちが21世紀を生き抜くために、国際的共通語となっている「英語」のコミュニケーション能力を身に付けることの必要性を提唱している。そこで、高等学校の英語科の学習指導においては、英語を使って情報や相手の意向などを理解したり、自分の考えなどを表現したりできる実践的コミュニケーション能力を育成することが求められている。そして、このねらいを実現するためには、生徒の英語力を多面的に評価し、評価結果を日々の指導に生かすことが重要である。

しかし、言語材料の知識・理解のみならず、表現力などを把握する評価が工夫されてきてはいるものの、評価結果が生徒の自己実現に結び付いているとはいえない。これは、生徒に身に付けさせたい英語力のとらえが明確ではないことと、効率的に評価を進めようとするために、評価の妥当性が高まっていない状況があるためと考えられる。

このような状況を改善するためには、高等学校において育成すべき英語力を明らかにし、それが身に付いているかどうかを適切にとらえる評価方法を工夫し、その評価結果を指導に生かして、生徒が意欲をもって学習に取り組めるようにすることが必要である。

そこで、この研究は指導に生かす評価方法を工夫し、学習指導の過程における評価を意図的に進めることにより、英語力を育成する高等学校の学習指導の在り方を明らかにし、指導の充実に役立てようとするものである。

研究仮説

高等学校において育成すべき英語力を明らかにし、実際の目的のために英語を使う能力を適切にとらえる評価方法を工夫し、生徒のパフォーマンスの評価結果を継続的にフィードバックする学習指導を行っていけば、生徒の英語力が育成されるであろう。

本年度の研究の内容

先行研究及び文献を基に、英語力を育成する高等学校の学習指導に関する基本構想を立案する。

基本構想に基づき、指導に生かす評価の工夫を図る学習指導の試案を作成するために、研究協力校の生徒を対象に実態調査を行い、その結果について分析と考察を行う。

指導に生かす評価方法の工夫を図る学習指導の試案を作成する。

研究結果の分析と考察

1 英語力を育成する高等学校の学習指導に関する基本構想

(1) 英語力とは何か

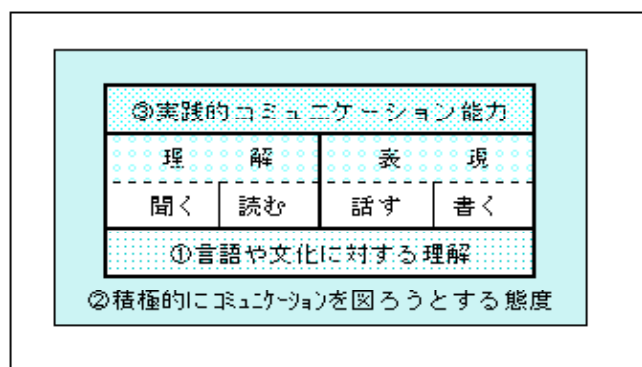
21世紀を迎え、国際社会の政治や経済の枠組みが大きく変貌しつつある。このことは、これまでの世界秩序やルールが崩れ、国家や同じような社会体制による国家のまとまりという枠組みにとらわれない、地球規模での新しい秩序を早急に構築していく必要があることを示している。このような社会情勢の中で将来を担う生徒一人一人が、グローバルな社会の一員として、共に生きていくための資質や能力を身に付けることがより一層求められている。

それらの資質や能力のうち英語科の学習指導では、国際語としての英語の音声、語彙、文法などに

についての知識を身に付けさせ、「聞く」「読む」「話す」「書く」技能を総合的に用いることができるスキルを育成することが求められている。したがって、今後の英語教育における課題は、「英語についてどんなことを知っているか」という知識の量を増やすだけではなく、「英語を手段として用いて何ができるようになるか」という手段としての技能の育成にシフトしていく必要がある。

では、英語力とはどのようなものなのか、どのような知識・理解・技能の変容を期待するのか、学習指導要領と「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」(本資料では省略)が示す英語力を基に、本研究における英語力について述べることとする。

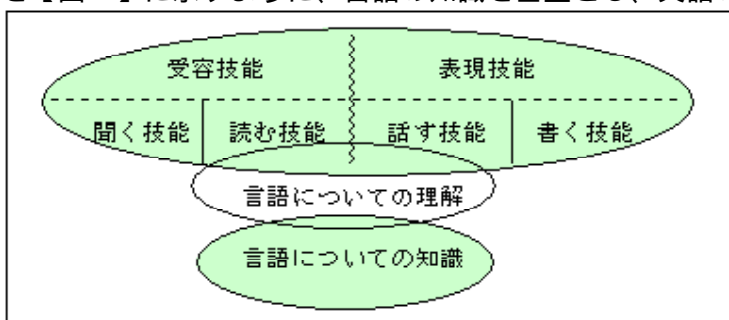
【図1】は、学習指導要領における英語の学力を示したものである。実践的コミュニケーション能力の育成は、新学習指導要領における生きる力の育成を外国語科の目標として具現化したものである。【図1】に示すそれぞれの資質や能力は互いに有機的な関連をもっているが、とはを育成するうえで基盤となるものであるとともに、が育成されることにより、が向上し が深まると説明されている。



【図1】 学習指導要領における英語の学力

コミュニケーション能力のとりえについては 諸説があるものの、広く支持されているCanaleとSwainの説によれば、「文法能力」「談話能力」「社会言語学的能力」「方略的能力」の四つから成る。この考え方における社会言語学的能力と方略的能力については、学習指導要領では、言語活動の取り扱いの中の指導上の配慮事項として位置付けられている。

以上のことを踏まえ、本研究では英語力を【図2】に示すように、言語の知識を基盤とし、英語の音声や文字を使用して、情報や相手の意向を受容することができる技能と自分の考えや意向を表現することができる技能ととらえ、研究を進めていくこととする。なお、観点別学習状況の評価では、関心・意欲・態度が第一観点となっている。



【図2】 本研究における英語力

これらは知識を深め、技能を駆使するた めの土台になるものであることから、知識や技能と一体のものにとらえることとする。また、知識・理解は第四観点となっているが、本研究では理解をより技能に近いものにとらえることとする。

(2) 指導に生かす評価方法の工夫のとりえ方

ア 「英語力の発達の見通し」の作成

学習指導要領が求めている「実践的コミュニケーション能力の育成」は、最終的なゴールではあるが、学校教育において英語教育に携わる者にとっては、「生徒の発達段階に応じてどのような英語力を身に付けさせたいか」についての理解が困難である。生徒に身に付けさせたい英語力のとりえ方について、指導者が不確かな状況においては、どのような方向に学習を進めていけばよいのかが生徒にとって分かりにくく、したがって英語を学習することによる達成感も得られにくい。

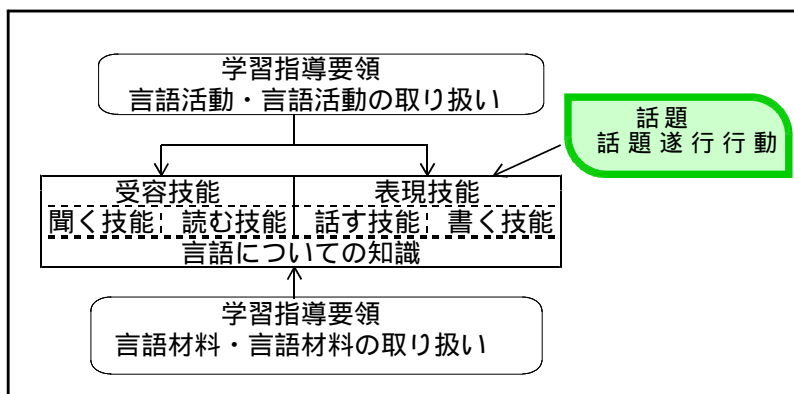
英語力とは螺旋状に連続的に育成されていくものであることから、生徒の発達段階の見通しに基づ

き、「英語を用いて、どのような場面で、どのようなことができるのか」を明らかにする必要がある。例えば、学習指導要領のオーラル・コミュニケーションの言語活動に示された「情報や考えなどを、場面や目的に応じて適切に伝える」ということを、「どのような情報」「どのような考え」「どのような場面」「どのような目的」なのかを明らかにしていく必要がある。本研究では、学習指導要領や研究協力校における実態調査等を基にして「英語力の発達の見通し」を作成していくこととする。

イ 実際の目的のために英語を使う能力を適切にとらえる評価方法の工夫

実際の目的のために英語を使う能力を評価するには、学習した英語の語彙や文法・構文などについての知識をフルに用いて実際に使ってみる学習を行う必要がある。そのためには、実際の目的のために英語を使う学習課題を設定する必要がある。英語教育においては、この課題をタスクと呼ぶ。タスクとは、「学習者が取り込む活動で、言葉を伝達あるいは思考の手段として用いる、第二言語の要素の学習以外の、意義ある結果に至るようにデザインされているもの」(Ellis 1994)である。タスクを設定する際は、コミュニケーションが行われる場面を設定し、言語の機能を意識させることが必要である。このことにより、求められている学習内容と実際の言語使用との関連性が生徒にとって理解しやすく、動機付けが図られると考えられる。

本研究では【図3】に示したように、表現技能を高めるためのタスクを設定する際は、学習指導要領の各科目の内容の中から「言語活動」と「言語活動の取り扱い」を基にし、「自分の部活動についてクラスメートに話す」や「環境問題を扱った新聞記事について、自分の考えを整理して要点を書く」などのように、話題と、話題について「～することができる」という話題遂行行動を加えて設定していくこととする。これらの評価に当たっては、生徒のパフォーマンスを質的に描写する判定の基準を作成する必要がある。



【図3】 実際の目的のために英語を使う能力をとらえる評価

ウ パフォーマンスの評価結果を継続的にフィードバックする学習指導

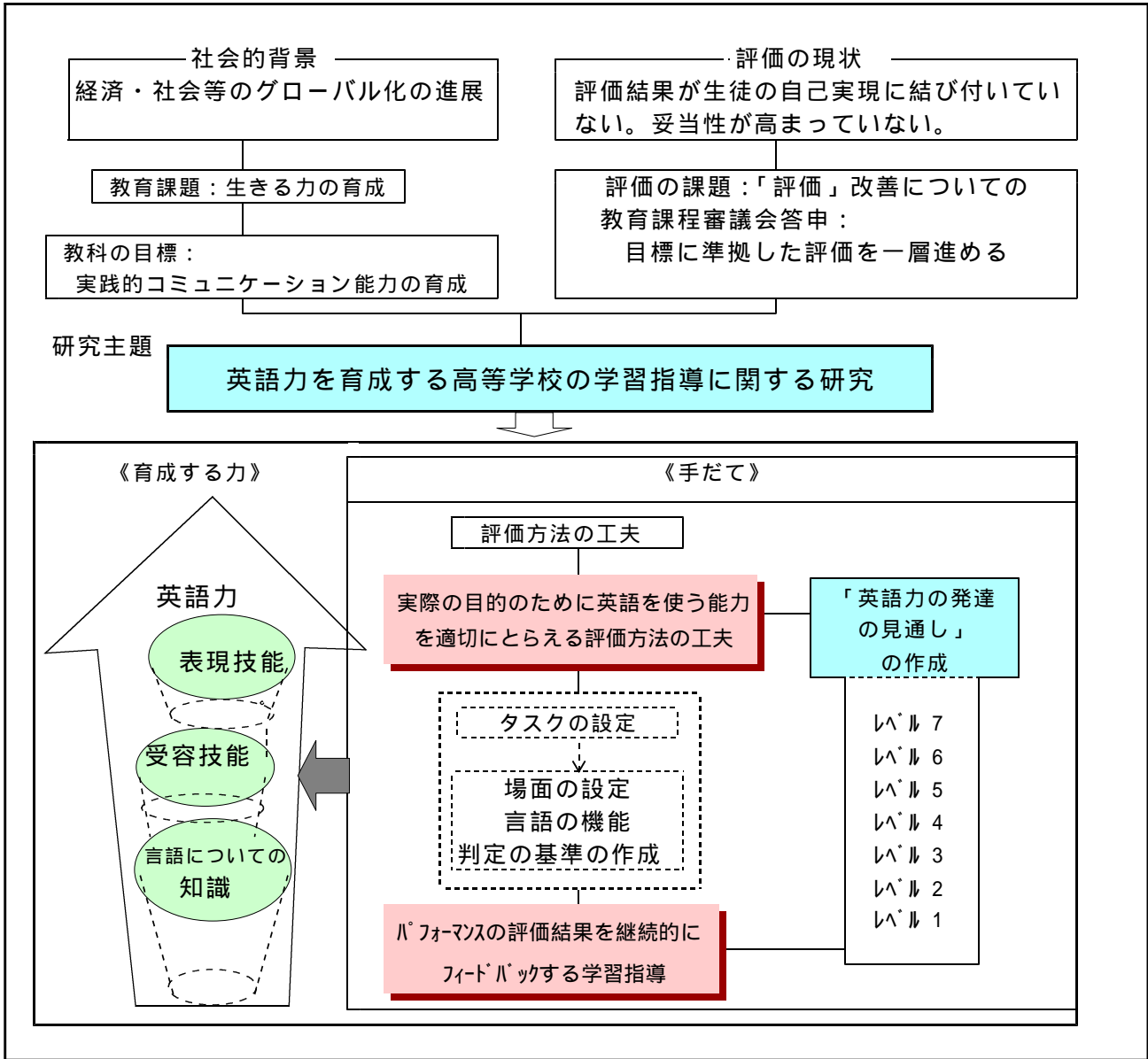
生徒のパフォーマンスの評価結果を継続的に返して生徒に学習状況を知らせ、自分の学習を見つめ直させることが大切である。しかし、テストなどによる総括的な評価とは異なり、評価を行い結果を返すということが頻繁に行われることから、教師の労力がかかりすぎるなどの困難点がある。評価にあたってのタスクや判定の基準を共有し合うなどして、評価の実用性を高めていくことも大切だと考える。また、言語の知識や受容技能の評価については、これまで行ってきたように総括的な評価を重視し、表現技能の評価については、継続的な評価を工夫して教師の過重な負担にならないように配慮することも必要である。

(2)のAで述べた「英語力の発達段階の見通し」に基づき、「英語を用いて何ができるようになったのか」「何がまだできないのか」を判定し、達成している場合は次のレベルへ、未達成の場合はどのように学習していけば達成できるのかを具体的に診断し、生徒に評価結果を継続的にフィードバックすることが必要である。このようにして、生徒に評価結果を返していくことにより、達成感や成就感を高め、学習意欲を高めていくことができる。また、このような評価を行うことにより、達成している

か、達成していないだけでなく、生徒の学習過程や努力を評価することも可能だと考える。

(3) 英語力を育成する高等学校の学習指導に関する基本構想図

英語力を育成する高等学校の学習指導に関する基本的な考え方について、これまで述べてきたことを基に、【図4】のように基本構想図を作成した。



【図4】 英語力を育成する高等学校の学習指導に関する基本構想図

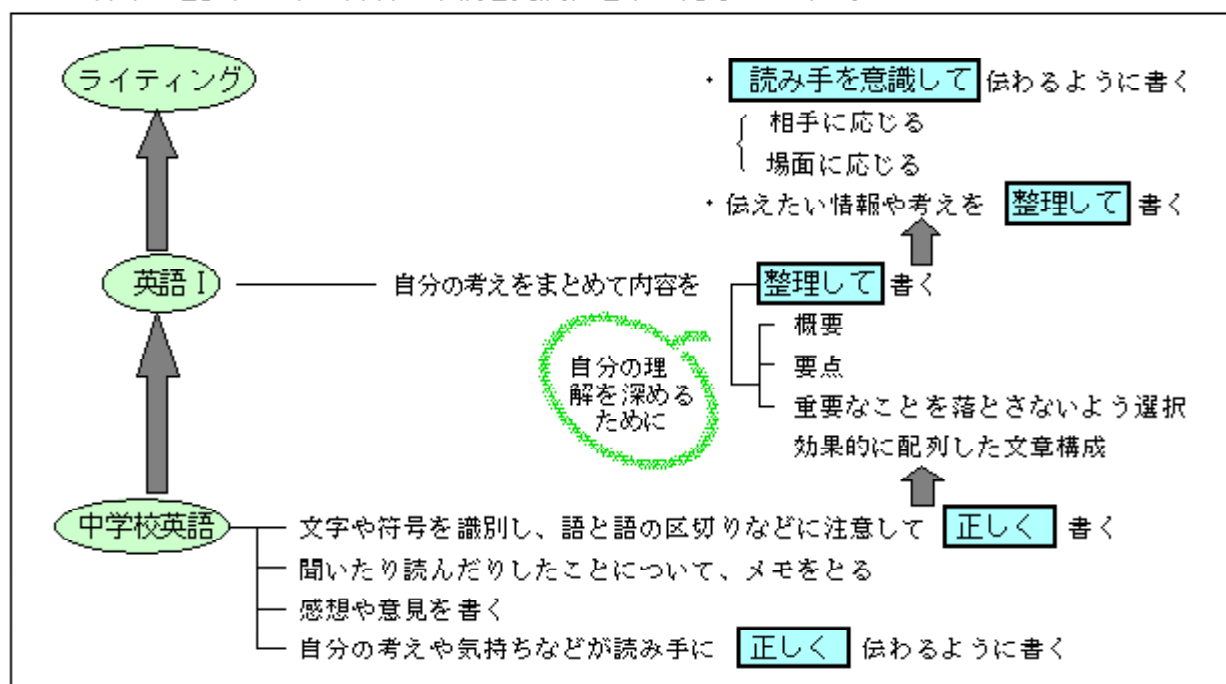
かす評価方法の工夫を図る学習指導の試案

(1) 高等学校における「英語力の発達の見通し」の作成

高等学校における「英語力の発達の見通し」を作成するために、本研究では、学習指導要領と「評価規準、評価方法の研究開発(中間整理)」(平成15年9月)(以下「中間整理」と呼ぶ)における科目の発展性を系統立て、The National Curriculum for England: modern foreign languages(以下ナショナル・カリキュラムと呼ぶ)における発達段階の設定を基に、本研究における「英語力の発達の見通し」(案)を作成し、研究協力校における生徒の技能がどのように発達しているかを調査し分析する。そして、～を踏まえて、本研究における「英語力の発達の見通し」を作成することとする。

ア 学習指導要領及び「中間整理」における科目の発展性

【図5】は、学習指導要領の英語とライティングにおける「言語活動」と「言語活動の取り扱い」の記述と、「中間整理」における英語の評価規準の具体例と、中学校の学習指導要領を参考にして、「書くこと」における科目の系統と発展性を示したものである。



【図5】 学習指導要領及び「中間整理」における科目の発展性

イ 英国のナショナル・カリキュラムにおける発達段階

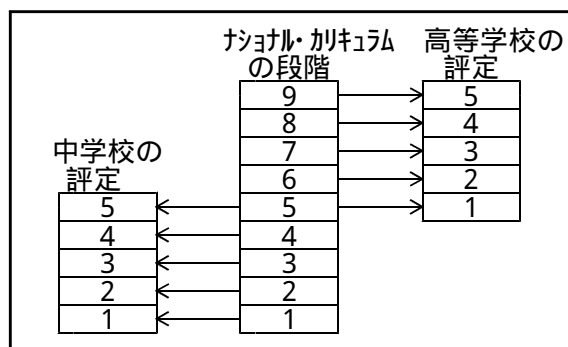
言語能力の発達段階については、合衆国の ACTFL (American Council on the Teaching of Foreign Languages) やカナダの Benchmarks、ヨーロッパの Common European Framework of Reference for Languages などの先行研究がある。これらの中で、数十年間にわたって教員がボトム・アップの形で作成してきたこと、全国的な修正を二度経ており、妥当性が高いことの二つの理由から、本研究では英国のナショナル・カリキュラムを基にすることとする。

ナショナル・カリキュラムは、「聞いて応答すること」「話すこと」「読んで応答すること」「書くこと」の四つの技能と、それぞれの技能ごとに九つのレベルを設定している。例えば、「書くこと」のレベル6は、「生徒は単純で叙述的な言葉を用いて、過去や現在や未来の行為や出来事に言及して、複数のパラグラフで書く。(以下省略)」という行動を指標としている。

ウ 本研究における「英語力の発達の見通し」

(案)の作成

松沢(2002)は、ナショナル・カリキュラムのレベルと日本の中学校と高等学校の評定のかかわりを【図6】のように提案している。それを踏まえて、本研究ではナショナル・カリキュラムのレベル5からレベル9の段階を、高等学校における発達段階ととらえることとする。また、高等学校入学の段階で、基礎・基本が十分には身に付いていないこともあることから、中学校の評



【図6】 ナショナル・カリキュラムと中等学校の評定とのかかわり(松沢)

定3と評定4にそれぞれ該当するレベル3とレベル4の段階を加えることとする。

前頁(1)のイでも例を挙げたとおり、ナショナル・カリキュラムは、それぞれの段階で生徒がどのような行動を行うか、また、その行動の結果どのような作品を作成するかについて、一連の文章で記述をしている。

本研究では、教師の指導改善と生徒の学習改善に結び付きやすいように、ナショナル・カリキュラムのそれぞれの段階の記述内容を細分化することとする。すなわち、どのような「話題」について、どのような「話題遂行行動」を示すか、また、それらの行動はどのような「条件」の基に、どのような「できばえ」を示すかという視点で整理することとする。要するにこれらの視点は、「何について = 話題」、「どのように = できばえ」、「何をしている = 話題遂行行為」ということを意味するものである。

これまで述べてきたことを踏まえて、来年度は書く技能の育成を図る授業実践を予定していることから、「書くこと」における「英語力の発達の見通し」(案)(本資料では省略)を作成した。

エ 「英語力の発達の見通し」を作成するための実態調査

「英語力の発【資料1】 実態調査の概要

「英語力の発達の見通し」を作成するに当たって、生徒の行動や行動の結果生じた作品についての具体的な事例を収集するために、研究協

1	調査方法	英語による作文		
2	調査内容			
(1)	課題	花巻南高等学校を訪れる予定の姉妹校の生徒に、学校を紹介するEメールを送ること。		
(2)	目的	姉妹校の生徒が来日する前に、学校についての予備知識をもってもらい、今後有意義な交流が行われるようにする。		
	番号	話題	場面	言語の機能
	1	花巻南高等学校を紹介する	学校	紹介する
	2	花巻を訪れたときにやってみたいことを尋ねる	地域社会	意向を尋ねる
	3	返事を期待していることを伝える	学校	依頼する
(3)	条件	・30分以内でできるだけ多くの英文を書く ・必要に応じて辞書を使用する		

力校である県立花巻南高等学校の国際科(1年41名、2年35名、3年36名)を対象として実態調査を実施した。【資料1】は、実態調査の概要である。

オ 実態調査の分析と考察(本資料では省略)

カ 本研究における「英語力の発達の見通し」

次頁【表1】は、これまで述べてきたことに基づいて作成した「英語力の発達の見通し」である。

(2) タスクの設定

生徒の英語力がどのように変容しているかについて、直接的に把握することは困難である。そこで、行動や行動の結果生じた作品などとおして英語力の変容をとらえることができるように評価方法を工夫する必要がある。その評価方法に用いる課題がタスクである。タスクを用いて、生徒の英語力の変容を的確にとらえることができるような行動をおこさせ、その行動をおこさせた英語力がどの発達段階に位置するのかを分析・考察していく。タスクの設定の仕方については、高等学校においては多くの場合検定教科書を教材として使用していることから、次の二通りが考えられる。

オーラル・コミュニケーション、リーディング、ライティングの場合は、科目の学習指導が主に単独の技能の育成を目指しており、教材が言語の使用場面や言語の機能に基づいて配列されていることから、教材のタスクをそのまま、あるいは一部修正をして用いることが可能である。英語や英語については、「聞く」「話す」「読む」「書く」という四つの言語技能を有機的に関連させながら育成することが科目のねらいであるために、検定教科書は多くの場合、題材や言語事項の難易度の順に配

【表1】 本研究における書く技能についての高等学校の「英語力の発達の見通し」

段階	行 動		条 件	できばえ
	話 題	話題遂行行動		
レベル 7	・幅広い一連の 事実 ・想像上の話題	・首尾一貫して 正確に書く	・文体や書く領 域を変えるた めに資料を適 切に使う	・文章の種類に 合わせて効果 的に書く
レベル 6	・自分の考え ・自分の意見	・自分の考えや 意見を正当化 して書く ・他人の意見を 求める	・言葉の幅を広 げ正確さを向 上させるため 参考資料を用 いる	・文章の種類に 合わせて適切 に書く
レベル 5	・自分の考え ・自分の意見	・いろいろな長 さの文を書く ・編集し書き直 す	・正確で豊かな 表現となるよ うに参考資料 を用いる	・ほぼ適切に書 く
レベル 4	・自分の気持ち ・事実	・複数のパラグ ラフを書く	・文法を適用す る	・文と文、パラ グラフとパラ グラフをほぼ 適切につなぐ
レベル 3	・自分の気持ち ・事実	・単文を使って 書く	・既習単語を確 認し辞書等を 用いる	・事実と自分の 気持ちを区別 して書く
レベル 2	・身近なこと ・聞いたり読ん だりした内容	・3～4の短い 文を書く	・記憶している 単語を頼りに する ・既習単語の確 認に辞書等を 用いる	・事実と自分の 気持ちを区別 して書く
レベル 1	・身近なこと ・聞いたり読ん だりした内容	・2～3の短い 文を書く	・教科書等の補 助を使う	・好き嫌いや気 持ちなどを表 現する

何について
～する

どのような条件
のもとに

どのように
～する

効果的に書く
 ・主題を提示する
 ・内容を対比させる
 (比較・対照)
 ・具体例を示す
 ・因果関係を示す
 ・重要なものから順
 に示す
 ・時間の順に示す
 ・5 W 1 H に気を
 付ける

適切に書く
 ・読み手を意識して
 伝わるようにする
 { 相手に応じる
 場面に応じる
 ・事実と自分の考え
 を整理する等

「注」1 レベルの数値が高いほど英語力が発達していることを示す。

2 レベルをどのように評定に結び付けるかということについては、指導目標や生徒の実態に応じて各学校で判断する必要がある。

3 生徒の英語力の発達は個々に異なるものであることから、段階を踏んで発達しないこともあり得る。

4 表右の「効果的に」と「適切に」などをとらえるためには、タスクと合わせて判定の基準を作成する必要がある。

列されている。したがって、教科書に基づいてタスクを設定すると、言語の知識の定着や習熟をとらえるためのタスクになってしまうことから、実際の目的のために英語を使う能力を的確に把握するためのタスクを設定する必要がある。

タスクを作成する手順については、次頁【図7】に示すように、まず、学習指導要領の「言語の使用場面の例」等を参考にして、どのような「話題」について、どのような「場面」における課題にするかを設定する。「場面」とは、個人的なコミュニケーションの場面であれば、「電話、インタビュー

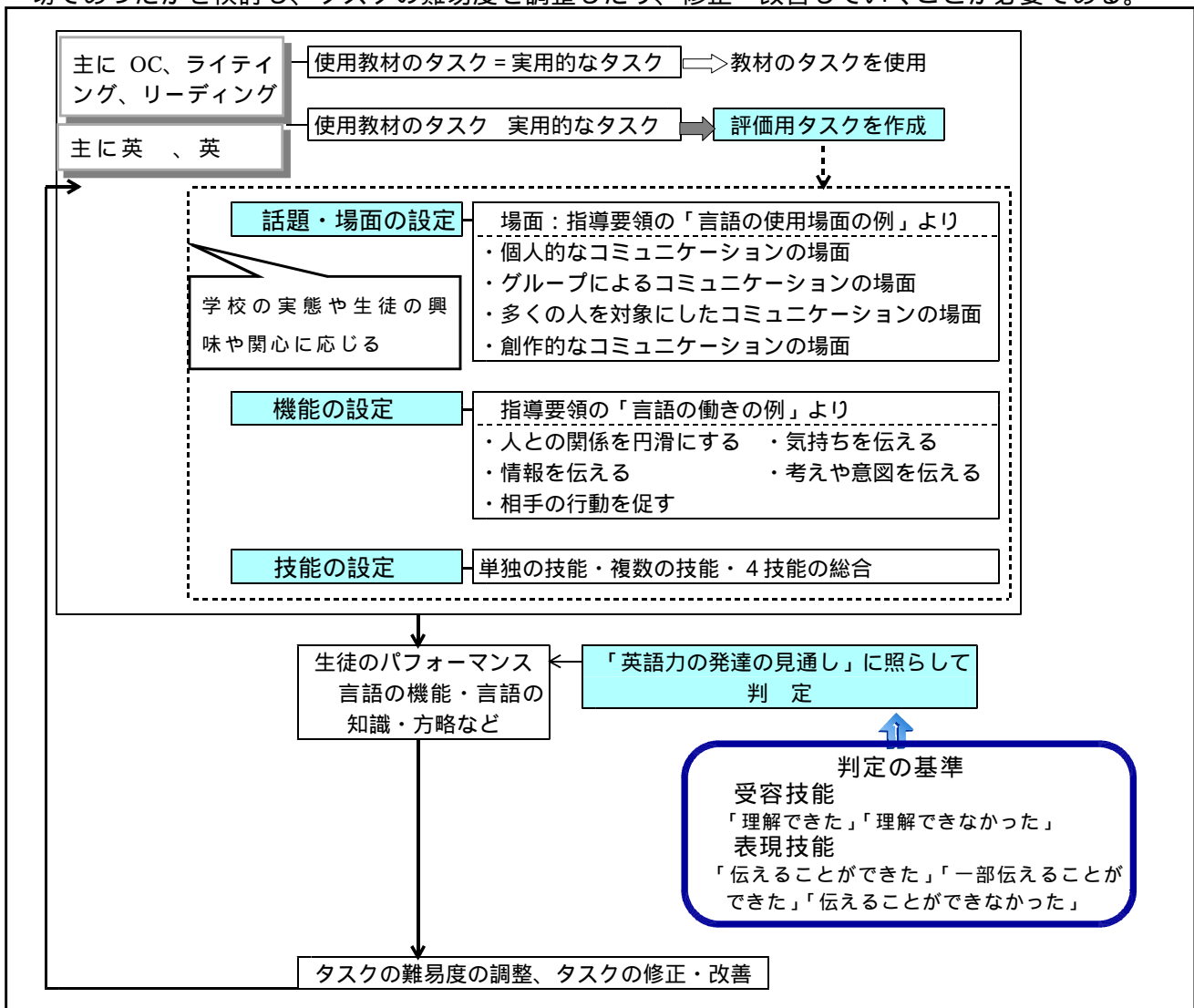
一、電子メールなど」、グループにおけるコミュニケーションの場面であれば、「スピーチ、ディベートなど」が考えられる。「話題」と「場面」を設定する際、学校の実態や生徒の興味や関心に応じるタスクを設定し、生徒の活動に取り組む意欲を高める工夫をすることが望ましい。

そして、次に学習指導要領の「言語の働きの例」等を参考にして「機能」を設定する。「機能」とは、気持ちを伝える機能であれば、「感謝する、同情する、苦情を言うなど」、相手の行動を促す機能であれば、「依頼する、誘う、示唆するなど」が考えられる。

さらに、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能のうち、単独の技能を用いるのか、複数の技能を用いるのか、4技能を総合的に用いるのかを決定する。

設定したタスクを生徒が示してみせるパフォーマンスや、パフォーマンスの結果生じた作品について、作成した「英語力の発達の見通し」に照らして判定を行う。その際、パフォーマンスの状況を判定するための基準が必要である。この判定の基準は評価対象により異なるが、受容技能の場合は、「理解できた」「理解できなかった」の二つ、表現技能の場合は、「伝えることができた」「一部伝えることができた」「伝えることができなかった」の三つが必要である。

そして、生徒のパフォーマンスの判定終了後、設定したタスクが生徒の英語力をとらえるために適切であったかを検討し、タスクの難易度を調整したり、修正・改善していくことが必要である。



【図7】 タスクの設定の仕方

(3) 評価結果のフィードバック

ア 評価結果を継続的にフィードバックする意義

評価には指導を見つめ直すという指導改善と、学習の状況を見つめ直すという学習改善の二つの目的があることは言うまでもない。評価の妥当性を高め、特に生徒の学習改善に結び付くようにするためには、より短い期間における学習の成果を適切にとらえ、それを適時に即時的に生徒に返し、学習の動機付けを高める必要がある。このような評価は、定期考査の直前に集中的に学習するだけではなく、不断に持続的に学習することを生徒に期待することになる。そして、評価結果を継続的にフィードバックすることは、生徒自身の学習の仕方に責任をもたせるということにも結び付くものである。

イ 評価結果の継続的なフィードバックの仕方

(ア) 評価対象の設定

学習指導目標から導き出した生徒の学習の到達度を評価する。英語科の学習指導は、教科書や教材をどのように用い、どのような言語活動を行うかということと不可分に結び付いていることから、それらを踏まえて評価対象を設定することが必要である。例えば、学習指導要領のライティングの言語活動には、「ア 聞いたり読んだりした内容について、場面や目的に応じて概要や要点を書く」とある。このこと全体を評価対象に設定することも可能である。また、「場面に依じて概要を書く」「目的に応じて要点を書く」などのように細分化して評価対象を設定することも可能だと考える。

また、生徒の行動や行動の結果生じた作品だけではなく、行動や作品を生み出すまでの学習の過程や努力の状況の評価対象にすることが重要である。

(イ) 評価の時期

評価結果を継続的にフィードバックする方法においては、一連の学習の過程の中で必要に応じて複数回評価を行うことになる。話す技能については、主として授業中に生徒の言語活動への取組状況を評価することが実用的である。また、書く技能については、主として授業後に生徒が作成した作品を評価することが適切である。その場合、ペーパーテストとは異なり、生徒は自分の作品に十分納得のいくまで活動に取り組むことができることから、自分自身の学習状況を自分で見つめることに結び付くと考えられる。

(ウ) 評価の通知の仕方

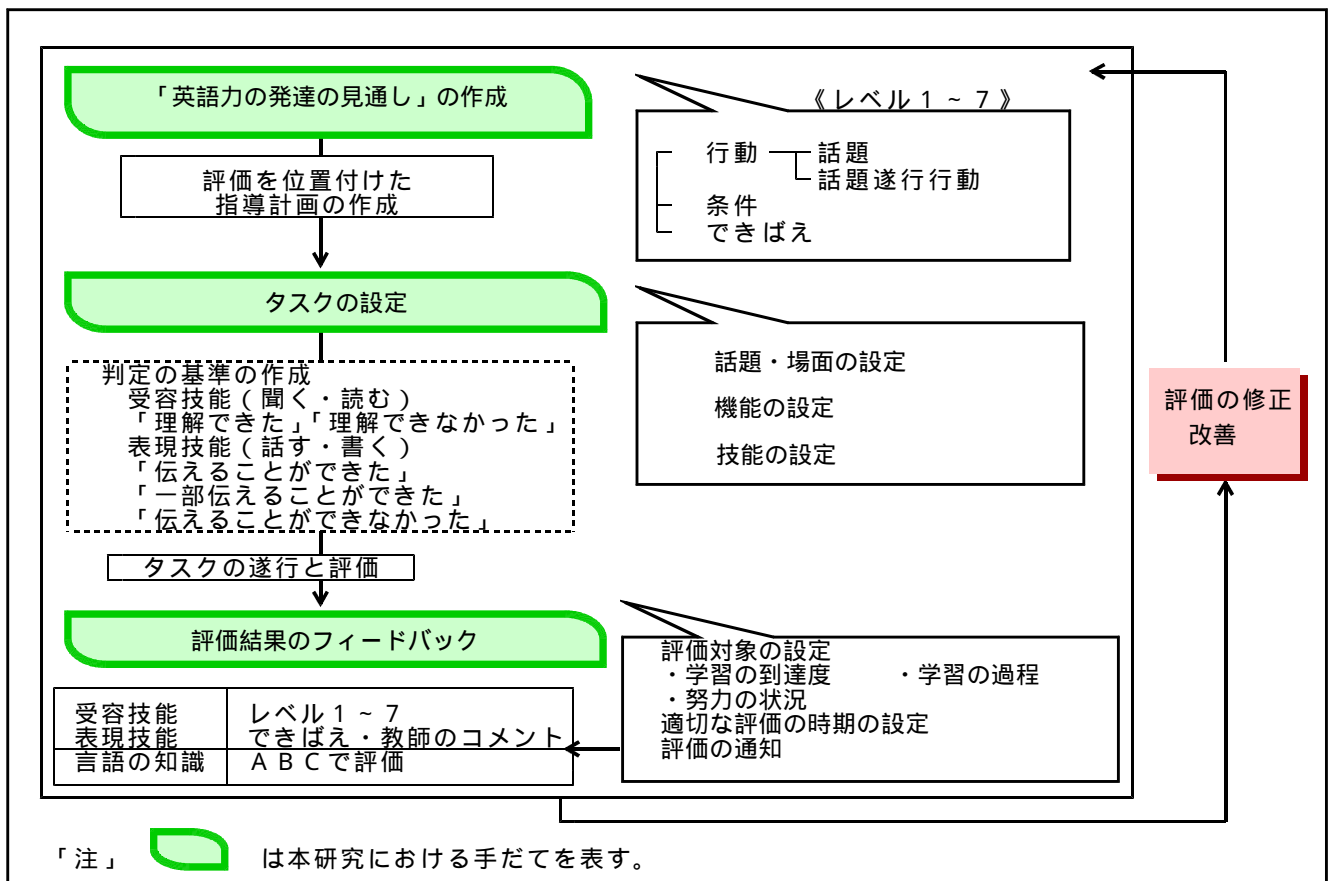
評価結果を継続的にフィードバックするためには、テストの点数や偏差値などの数値や評定のみを知らせるのではなく、【図8】に示したように、教師が言葉や記述を使って知らせることが必要である。それにより、生徒が評価結果を理解することが容易になり、また、

技能	段階 1~7	できばえ	Diagnostic Notes (教師のコメント)
受容技能			
表現技能			
知識	到達度	Diagnostic Notes (教師のコメント)	
言語の知識	音声	A・B・C	
	語彙	A・B・C	
	構造	A・B・C	

「英語力の発達の見通し」に照らしてして判定
英語を用いて何が出来るかを評価 例：姉妹校の生徒にEメールを送り、自分の学校を紹介することができる
学習の過程や努力を評価
A・B・Cを で囲む 「注」 吹き出しは、カードの使い方についての説明である。

【図8】 評価結果を通知するカードの例

また、学習の方向性が分かりやすく学習改善に結び付きやすいと考える。言葉を用いて評価結果を返す際には、学習への取組状況や努力の過程を評価し、生徒の学習意欲を高めることが必要である。次頁【図9】は、指導に生かす評価方法の工夫を図る学習指導の試案についてまとめたものである。



【図9】 指導に生かす評価方法の工夫を図る学習指導の試案

研究のまとめ

1 研究の成果

先行研究、英国のナショナル・カリキュラム、実態調査によって得た資料等に基づき、想定されるパフォーマンスの「行動」「条件」「できばえ」を位置付けた高等学校の「英語力の発達の見通し」を作成することができた。タスクの設定の仕方については、話題・場面を設定すること、言語の機能を設定すること、言語の技能を設定することについて明らかにすることができた。評価結果の返し方については、評価対象の設定、評価の時期、適切な評価用具、評価の通知の仕方について、明らかにすることができた。

2 今後の課題

「英語力の発達の見通し」の妥当性を高めるためには、4技能や、あるいは4技能を総合的に用いるタスクを課して、生徒の行動や行動の結果生じた作品について多くの事例が収集できるようにすることが必要である。来年度は、作成した試案を基に、評価を位置付けた指導計画を作成し、授業実践をとおして試案の妥当性について分析・考察を行う。

【参考文献】

Ellis, R. (1994). *The study of second language acquisition*. Oxford University Press.

松畑熙一・和田勝明著、「中学校・高等学校におけるコミュニケーション能力の育成と評価」, 開隆堂, 1995

キャロライン・V・ギブス, 「新しい評価を求めて テスト教育の終焉」, 論創社, 2001

松沢伸二, 「英語教師のための新しい評価法」, 大修館書店, 2002

金谷憲, 「英語教育評価論」, 河原社, 2003

<http://www.nc.uk.net/home.html>